

聖書:ルカの福音書9章10~17節

説教:パンを裂く

はじめに

先ほど皆さんと祈った「主の祈り」のなかに、「私たちの日ごとの糧を今日もお与えください」というのがあります。しかし今の時代、お金さえあればなんでも手に入ります。スーパーやコンビニに行って、好きなものを買ってくればよい。そんなところに行かなくても、今はデリバリーを使えば配達もしてくれる。そういう便利な時代ですから、「日ごとの糧を今日もお与えください」と祈っても、あまり切迫感を感じられません。けれども例えば十年前の震災とか、三年前に起きた胆振東部大地震が起きたりすると、たちまちスーパーの棚から食料品がなくなってしまう。そういうとき、食べられるということは当たり前のことではないと気がつきます。

今日の箇所には、イエスが五千人の人々にパンを与えたことが書かれています。弟子たちの手もとには二匹の魚と五つのパンしかなかったのに、人々が食べて満腹したあとで余ったパンきれを集めると十二かごもあった。このパンはいったいどこからでてきたのか。ここでイエスは、いったいなにをしてくださっていたのか、ともに見て参ります。

1 日が傾きかけた

1) 群衆

イエスは、ヨルダン川で洗礼を受けられてからこれまでずっと、神の国のことをまっすぐに語り、人々を癒やし、悪霊を追い出したばかりでなく、死んでいた娘さえもよみがえらせてきました。ですから今やイエスは時の人となり、国中は大騒ぎです。新興宗教の教組ならば、信者を増やして勢力を拡大する絶好のチャンスですからこの機会を利用しない手はない。ところが、イエスは人々から逃れるようにして、ガリラヤ湖の北側にあるベツサイダという町に隠れようとする。それでも誰かが見つけたのでしょうか。あそこにイエスがいるぞ言っただけで、あっという間に広がって、群衆がイエスの後をついて来た。イエスはそんな人々を追いつ返すのではなく、喜んでいつものように福音を語り、病を癒やしていきます。

2) 弟子たち

そこまではよかった。ここで問題が発生します。12節。「日が傾き始めたので、十二人はみもとに来て言った。『群衆を解散させてください。そうすれば、彼らは周りの村や里に行き、宿をとり、何か食べることができるでしょう。私たちは、このような寂しいところにいるのですから。』」

ここは荒野のど真ん中で何もないから、明るいうちに群衆を近くの村や里に異動させて、宿をとったり、食事ができるようにしなければならない。何も食べないで、ここで夜を明かすのは大変危険だということです。実にまっとうな判断です。

これを聞いてイエスは、「あなたがたが、あの人たちに食べる物をあげなさい」と言う。ところが弟子たちの手もとにあったのは、五つのパンと二匹の魚だけ。自分たちの分できさ足りないのに、これでどうやって五千人の人々を食べさせられるのか。それで弟子たちはあきれてこう言う。

「私たちが出かけて行って、この民全員のために食べ物を買うのでしょうか。」仮に弟子たちが買いに行ったとしてもどうでしょうか。おそらく全体で一万人近い人数です。今の時代でも、一万人分のお弁当をわずか数時間の間に用意することはできないでしょう。

2 イエス

1) 天を見上げ

それなのにどうしてイエスは、「あなたがたが食べる物をあげなさい」と言われたのか不思議です。とにかくイエスは、群衆を五十人ずつのグループに分けて座らせ、弟子たちが持って来た五つのパンと二匹の魚を手にとってから、三つのことをします。

一つ目。「天を見上げ(た)。」かつてイエスが洗礼を受けられてヨルダン川から上がられると、天が開けて声がしたと3章にあります。「あなたはわたしの愛する子。わたしはあなたを喜ぶ。」ですから、イエスが天を見上げるのは、そこにおられる父なる神を覚えてのことでしょう。でも、ルカの福音書の中でイエスが天を見上げるのはこの場面しかないのです。そうすると、なにか理由があったからということになる。そのことはまた後で触れることにします。

2) ほめたたえ

イエスがなされた二つ目。「神をほめたたえた」と16節にあります。主ご自身が神をほめたたえる場面はルカの福音書の中で、このところとイエスが死からよみがえって、弟子たちの目の前で天に上げられる場面、その二回しかない。ということは、天を見上げるのもそうでしたが、ますますイエスはここで特別なことをしようとしていたということになります。

3) 裂いた

三つ目。「それ（パン）を裂いた。」その途端、イエスの手もとからまるでパンの工場のようにどんどんパンが出てきて、それを弟子たちが配った。そんな場面を想像したくなります。「そんなことがあるはずがない。私は実際に見るまで信じない。」多くの人はそう言うでしょう。では、目の前で見ていた弟子たちはどうだったのか。見ていたはずなのに、何もわかっていないのです。結局、イエスが十字架におつきなると、見捨てて逃げてしまった。ということは、実際に見ていたかどうかではない。むしろ見えないところにこそ、大切な真実があるのではないか。では見えないものとはなにか、そのことを最後に考えます。

3 パンはどこから来たのか

1) 自分のためではなく人々のために

そのことを考える糸口として、イエスが悪魔から誘惑を受けられたときのことを思い出してみます。イエスが四十日間、荒野で断食をしたとき悪魔が近寄って来てこう言います。「あなたが神の子なら、この石に、パンになるように命じなさい。」(4章3節)これに対しイエスは「『人はパンだけで生きるのではない』と書いてある」と語ります。自分の思いや欲望ではなく、聖書のみことばに従うことこそが大切であるとイエスが教えてくださった。こんなふうに説明されることが多い。

しかしそれだけなのか。空腹ということに関して言えば、今日の箇所と共通点があります。イエスはご自分が空腹であったとき、悪魔に言われるまでもなく、石をパンに変える力は持っていましたから、そうしようと思えばできた。けれどもイエスは石をパンに変えなかった。

ところが、この箇所ではどうでしょう。男だけで五千人にも上る群衆が荒野でひもじい思いをしているというとき、イエスは目の前にあるわずかのパンを裂いて、群衆に配り、満腹させるのです。この二つを比べてください。何がわかりますか。イエスは、ご自分が持っている力をご自分のため

に絶対に用いようとしない。その代わりに、苦しむ人々のために、病む人々のために、ひもじい思いをしている人々のためには、躊躇しないで用いていく。そういうことがわかる。

2) ご自分のからだを裂く

では、いったいどこからパンは出てきたのか。決して何もないところから出てきたのではない。イエスはヨハネの福音書6章51節でこう言われています。「わたしは、天から下って来た生けるパンです。だれでもこのパンを食べるなら、永遠に生きます。そして、わたしが与えるパンは、世のいのちのための、わたしの肉です。」(ヨハネ6章51節)

この方のからだがいちのちのパンであるというのは、単なるたとえでない。実際にそうだというのであるなら、イエスはご自分のからだを裂いて群衆に分け与えたことになる。でもそんなことをしたら、普通はただでは済まない。からだを裂くのですから、痛いはず。血を流すはず。それなのに誰も気がつかなかった。人の目には見えないからです。見えないから何も起きていないのではない。十字架のことが先取りされているのです。目に見えなくても、霊的に言えば、イエスのからだは裂かれている。

そうしたら先ほどの疑問に戻ります。なぜイエスはパンを裂く前に天を見上げるのか。なぜ神をほめたたえたのか。そもそもイエスは、十字架におつきになるという父のみこころ成し遂げるために天から降って来られたのです。それが今ここで、ご自分のからだを裂いて群衆に分け与えようとしていく。まさに十字架が始まっていくから。だから天を見上げて、神をほめたたえる。

イエスが神をほめたたえると聞くと、平和で光り輝く風景を想像したかも知れません。でも、主のからだは裂かれていくのです。どんなに激しい痛みだったか。主はそのことを隠して、見せようとしません。

でも今気がつきます。罪ある私たちを救うために、神の子であるイエスが人となられ、ご自分のからださえも分け与えてくださった。その恵みを覚え、この方の御名をあがめたいと願います。